私たちの人生は神さまの御手の中に

奨励	カリン・トシャン〔かりん・としゃん〕
奨励者紹介	アジア学院 研究科生

「イスラエルの家よ、この陶工がしたように、わたしもお前たちに対してなしえないと言うのか、と主は言われる。見よ、粘土が陶工の手の中にあるように、イスラエルの家よ、お前たちはわたしの手の中にある。」

（エレミヤ書　１８章６節）

神さまは私たちを造られた

神さまがこの世界を造った時、空には鳥を、海には魚が増えるようにと言いました。皆さんもご存知のように、神さまは何度も産めよ、増えよ、と言いました。そしてそうなりました。しかし、神さまは人間を造られる時、神さまに似せて造りました。私たちは、父、子、聖霊のイメージで造られたのです。

私は創世記１章２６節を読んだ時、神さまの御手の中にあって自分たちがいかに重要なものであるかを知りました。世界を見渡す時、何千人もの人が自殺をし、命を絶つことは、とても悲しいことです。彼らや彼女らは、自分たちがいかに大切な存在であるかを知らない、もしくは気づかないでいるのです。

明けない夜はなく、終わらない戦いもないのです。どんな状況にも希望があり、変化することは可能です。どんな時でもイエスさまはあなたのそばにいるのです。

死の淵からの私の祈り

私の村では、１９９０年から１９９３年に内戦がありました。深夜か早朝に、村人たちの家は焼かれ、人々は殺されました。ある夜、たくさんの兵士が私たちの村に来て、家々を焼き、人を殺し始めました。私はまだ幼く眠っていました。父が、「走れ」と叫び、私は飛び起きて走り出しました。私は両親がどこにいるのかも知らず、自分がどこにいるのかさえも分かりませんでした。深い森の中で私は３日間過ごしました。人の気配は全くなく、動物たちの声だけが聞こえました。食べるものもなく、飲むものもありませんでした。

その時、私は希望を失い、「私はここで死ぬのだろうか」と自問していたことを、今でもよく覚えています。「もう両親にも会えないのだろうか」と。しかし同時に、私は神さまに祈っていました。「まだ死にたくない。もしまだ生きていられるならば、必要としている人々のために生きる」と。私は神さまに何度も問いかけ、ついに私は森の外に出る決心をしました。

私は難民キャンプに辿り着きました。そこには２０００人もの人々が生活をしていました。両親にもそこで再会することができました。私は１９９０年からホームレスとなり、私たちが建てた家は３度も焼かれました。次第に私は希望を失い、もう家を建てても仕方がないのだと感じました。紛争は何度も何度も繰り返し起こっていたからです。

しかし私は、自分が神さまに祈ったことを思い出しました。「もし生きられるなら、人々のために生きる」と祈ったことを。私は難民キャンプと両親の元を離れ、神学校へと通い始めました。そして７年間の勉強を終え、家に戻りました。

ところが神学校から帰る道の途中で蚊に刺され、私は再び死の淵を彷徨いました。そこには病人のための薬もありませんでした。できることと言ったら、私の体から毒素の入った血を抜き、血小板の数を計ることだけでした。医者はその数値を見て、人として生きるためには低すぎる、このままでは死んでしまうと言いました。彼から見ると、私はもはや死んでいたようなものでした。また、治療のためのベッドの数が足りませんでした。２人の患者が一つのベッドで寝ていました。隣で寝ていた患者は、すでに死んでいました。血圧は下がり、肝臓が膨れ上がり、私は希望を失っていきました。皮膚も黒くなり、呼吸もできなくなってきました。この私が、食べることもできなくなってしまったのです。

友達がお別れを言いに来てくれました。友人の１人は、「死の準備はできたか」と私に聞きました。

私は、「うん」と答え、静かに目を閉じました。しかし心の中で神さまに祈っていました。「もし私が死ななければならないのなら、なぜ両親の近くで死なせてくれないのか。なぜ、こんな離れた土地で死ななければならないのか」。

誰もが私の死は避けられないと思っていましたし、私も同じように思っていました。そして、私は神さまに祈りました。「主よ。私を造ってくださったのは、あなたです。私の命をあなたにお委ねします。生きるも死ぬも、あなたの御手の中にあります。しかし、私の助けを必要としている人がいるならば、まだまだやるべきことがあります」と私は主に祈りました。

そしてそのまま眠りにつきました。その後、私の脈拍は戻り、夜中の１時３０分には通常値まで戻りました。医者も驚き、友人たちに「何を食べさせたのか」と聞きました。

生きる希望を与えてくださる神さま

主にある友人の皆さん、神さまは私たちの祈りを聞いてくださいます。あなたが誰であろうと、どこにいようとです。神さまは私たちの創造主であり、命を支えてくださるお方でもあるのです。マタイによる福音書１１章２８節に「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」とあります。

今日の社会では、多くの人たちが自分の生きる意味を見失いかけています。たくさんの人たちが空しさを感じ、壊れてしまったように自殺をしています。毎日、それも信じられないくらいの数の人たちです。生きる希望を見出せないのです。この世界では、人生において、私たちは粉々に壊れてしまうようなことがあります。しかし、私たちがどれだけ壊れていようが関係ないのです。神さまは私たちを買い戻そうとしてくださいます。私たちは価値もなく、希望をも失っているかもしれません。しかし、神さまは正しい方向へと再び導いてくださいます。

神さまが開いてくださる

私は神さまに約束したとおり、必要としている人々のために働いてきました。私は希望を失い、医者も友人も親戚もが皆、私は死ぬだろうと諦めていました。しかし、私は今でも生きています。それは、私の人々のために働くという神さまとの約束、その目的のために生かされているのです。

私は人々のために働くため、命を延ばしてくださった神さまに感謝しています。同時に、私たちの人生は神さまの御手の中にアジア学院とそのサポーターの皆さんにも、自分自身を変える機会をくださったことに感謝しています。

私たちがどれだけ壊れていようが関係ありません。神さまは陶器である私たちを買い戻そうとしてくださるのです。私たちは価値がない、希望がないと感じる時があります。そんな時でも、神さまは価値あるものとして用いてくださるのです。

２０１５年１１月１１日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録